

「貧しい者の祈りを聞かれる」

(詩篇10・1〜18)

一、主に信頼する者の幸い

1節をご覧ください。〈主よ なぜあなたは遠く離れて立ち 苦しみのときに 身を隠されるのですか。〉とあります。これは叫びであり、主への求めです。ここだけを読みますと、絶望に近い祈りのようにもみえますが、詩篇は最後まで見ないと最初の言葉の意味が分かりません。作者は主への絶大なる信頼を抱いています。10篇の終わりは、主への確信に満ちています。16節、17節をご覧ください。〈主は世々にわたって 永遠の王。国々は主の地から滅び失せました。主よ あなたは貧しい者たちの願いを 聞いてください。あなたは彼らの心を強くし 耳を傾けてください。〉と語っています。

二、信じるがゆえの感受性

詩篇10篇の作者をダビデとすると、とても読みやすくなります。と言いますのは、これだけの感受性を持ち、且つ語った言葉が詩篇として残るのは、古代イスラエルにおいて一般人が同じようなことをしても、取り上げられない、見向きもされない、門前払いで終わってしまうと思われるからです。詩篇と

して残ったということは、後に公の礼拝で用いられたということです。

2節をご覧ください。〈悪しき者は高ぶって 苦しむ人に追い迫ります。彼らが自分の企みに捕らえられますように。〉と語っています。「ダビデ」が「悪しき者」と語った者たちは、どこにいたのでしょうか。イスラエルの外側、すなわち異教の国々にいたのでしょうか。そうではありませんでした。「ダビデ」の身近にいました。身近な人々に不信仰を感じ取る感受性というのは、主なる神を信じる者特有のもので、自分のそばにいる方の心の内が見えてしまい、しかも動機が自分中心であったり、人を騙してまでのし上がろうとする思いが見えてしまったりする場合です。とてもがっかりすると言いましようか、落ち込みます。〈悪しき者〉とは主なる神を求めない者たちであったようです。3節、4節に〈悪しき者は自分自身の欲望を誇り 貪欲な者は主を呪い 侮ります。悪しき者は高慢を顔に表し 神を求めません。 「神はいない。」これが彼の思いのすべてです。〉と語られているからです。当時神の存在を信しない者はいなかったので、己の意のままなる神々を拝む偶像崇拜者であったと思われる。このような、人が持つ動機の悪さが気になり、結果心に痛みを感じる感受性はどこから来るのでしょうか。あるいは、いと高き神を信せず、己

を神とする傲慢な者たちのことで心を痛める感受性はどこから来るのでしょうか。神の御思いをいただいたときから、そのようになります。

三、苦しむ人・不幸な人・貧しい者

「ダビデ」は、身近にいる家臣や部下も含めて、多くの者が主を悲しませる生き方をしているのを見て、とても心を痛めました。5節、6節をご覧ください。〈彼の道はいつも栄え あなたのおさはきは高すぎて 彼の目に入りません。敵という敵を 彼は吹き飛ばしてしまします。彼は心の中で言っています。「私は揺るがされることなく代々にわたって わざわいにあわない。〉と語っています。

対して、主を仰ぎ、主に信頼を置く者たちのことを、三つの言葉で表現しています。一つは「苦しむ人」です。9節をご覧ください。〈茂みの中の獅子のように 隠れ場で待ち伏せます。苦しむ人を 捕らえようと待ち伏せ 苦しむ人を 網にかけて捕らえてしまします。〉とあります。

次は「不幸な人」です。10節です。〈彼の強さに 不幸な人は 砕かれ崩れ 倒れます。〉とあります。この節だけを見ますと、「不運な人」の意味のようにも思えますが、14節を見るときに、そういう意味ではないことが分かります。〈あなたは見ておられました。

労苦と苦痛を じっと見つめておられました。それを御手の中に収めるために。不幸な人は あなたに身をゆだねます。みなしごは あなたがお助けになります。〉とあるからです。

三つ目は「貧しい者」です。12節をご覧ください。〈主よ 立ち上がってください。神よ 御手を上げてください。どうか 貧しい者を忘れないでください。〉とあります。ここに書かれている「貧しい者」は「ダビデ」のことですから、生活に困窮しているという意味の「貧しい者」ではないことが分かります。「貧しい者」とは、神に頼らなければ生きて行けない人のことです。

四、必ずたどり着くところ

「ダビデ」は、まことの王が誰であるかをよく知っていました。まことの王は主(ヤハウエ)です。また「ダビデ」は、主が祈りを聞かれる方であることを知っていました。17節です。〈主よ あなたは貧しい者たちの願いを 聞いてください。あなたは彼らの心を強くし 耳を傾けてください。〉とあります。さらに、主が弱者を傲慢なものから守ってくださるお方であると告白しています。18節です。〈みなしごと虐げられた者を かばってください。地から生まれた人間が もはや彼らをおびえさせることがないように。〉とあります。